MUSASHINO for TOMORROW

Vol.112

巻　頭
音楽なしには生きられない
島田雅彦（小説家）

卒業生インタビュー
歌い続けてこの場所に
森谷真理（ソプラノ）

表紙：インゴ・ゴリツキ（オーボエ）

January 2015
vol.112

謹んで新春のお慶びを申し上げます

学校法人　武蔵野音楽学園　理事長　福井直敬

昨年末、突然に衆議院が解散し、第3次安倍内閣が発足しました。激しい社会の変化の中で、新政府には国民が安定した生活を営むことができる健全な経済政策を、長期的には、今をおいて解決が望めないであろう、少子化への積極的な対応策を期待したいと思います。

さて、江古田校舎の刷新を目指して取り組んできた「武蔵野音楽学園江古田新キャンパスプロジェクト」が、いよいよ本年4月から建設着工の段階となります。新校舎は、文化的な学生街江古田の、駅から徒歩4分でありながら閑静な住宅地に建設されるため、高さ制限、遮音対策等、厳しい規制や条例をクリアしなければなりませんが、反面、音大には最も望ましい明るく落ち着いた学修環境の中で、学生諸君は教職員の温かい支援のもと、意欲溢れる学生生活を展開できることでしょう。

新キャンパスには、上記の周辺環境を考慮し、大学の施設としては珍しい地下1階に掘り下げた中庭状の広場「サンクンガーデン」に接して、楽器博物館、3層から成る図書館、レストラン等が配置され、それらを取り囲むように、教室・管理室棟、レッスン室棟、練習室棟、合奏・合唱棟、3つのコンサートホール等が並びます。

また、これらの新施設では、平成29年度から一斉に授業が行われますが、これと併行して、学科、あるいはカリキュラムの大幅な改組・改革についても、検討を進めております。学生諸君が大学生活で何を教わるかという事よりも、学修目的や進路希望に応じて、自分自身が何を求め何を身に付けたか、を実感できる授業構成を考えてまいります。

さらに、これら学修生活を一層実りあるものとするために、大学の運営・管理組織の改組・改革を行いつつ教職協働の徹底を図り、教職員と学生の温かな交わりを通して、人格豊かな人材の育成に努力いたします。

毎年度、着実な進化を遂げる本学園に、皆様の変わらぬご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成28年度末に落成予定の江古田新キャンパス　完成イメージ図

音楽なしには生きられない

● 島田雅彦（小説家）●

1983年、東京外国語大学在学中に『優しいサヨクのための嬉遊曲』で作家デビューした島田雅彦さん。意欲的に新作を発表しつづける一方、小説以外でも戯曲やオペラの台本を手掛け、自ら舞台や映画、テレビドラマにも出演。さらに三島由紀夫賞（2000年～2007年）、芥川賞（2010年～）の選考委員、法政大学国際文化学部教授を務めるなど、さまざまな分野で活躍されています。クラシックにも造詣の深い島田さんならではの視点から、改めて音楽世界の奥深さを探る一文を寄せてくださいました。

島田雅彦 *Masahiko Shimada*

1961年、東京都生れ。東京外国語大学ロシア語学科卒。'83年『優しいサヨクのための嬉遊曲』を発表し注目される。'84年『夢遊王国のための音楽』で野間文芸新人賞、'92年『彼岸先生』で泉鏡花文学賞、'06年『退廃姉妹』で伊藤整文学賞を受賞。著書は『天国が降ってくる』『僕は模造人間』『彗星の住人』『美しい魂』『エトロフの恋』『フランシスコ・X』『佳人の奇遇』『徒然王子』等多数。'03年から法政大学国際文化学部教授。

音楽の歴史的背景

私たちは現在、iTunesのような音楽再生装置によって、壮大な音楽アーカイブを私有し、時と場所を選ばず、あらゆる時代と地域の音楽を聞くことができるし、どんな風変わりな音楽も面白がれる耳を獲得した。しかし、どのような経緯と理由によって、現在の音楽の多様性に行き着いたかほとんど何も知らない。

たとえば、音階という音楽の基本概念も一つの数学的発見だった。弦の長さ、あるいは管の長さによって異なる音の高さを厳密に計り、1オクターブを12音で構成することにして以来、音楽関係者がこれを踏襲してきたのである。しかし、アラブの音楽では今も半音の半分、つまり4分の1音を使うので、1オクターブは必ずしも12ではないのである。

ハーモニーもまた音楽に不可欠の要素だが、これも遠い昔に誰かが発見し、体系化したのである。カラオケでもうまく「ハモれる」と心地がいいが、外れると気持ちが悪い。教会で賛美歌を歌い始めたばかりの頃は、基本、誰もが同じメロディを歌っていた。しかし、何処にでも音痴の人はいて、自分では他の人と同じように歌っているつもりなのだが、微妙にずれてしまう人がいた。また男と女では声の高さが違うので、同じ音程にはならなかった。しかし、このズレこそが面白いと思う人がいて、最初から音程をずらして、同時に歌ったらどうなるかの試行錯誤を繰り返すうちに、和声の理論の元になるものが出来上がったのである。

だが、当時はまだ楽譜というものがなく、歌は口移しで覚えていた。それだと、手間がかかりすぎるので、もっと効果的に「ハモれる」ようにしようと、創意工夫をした結果、今日の五線譜の元になる記譜法が作られたのだ。

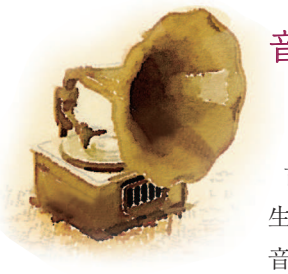
人は快楽にまつわることには熱心になる。歌が進化を遂げるのに石造りの建築物は大いに貢献しただろう。町全体が石でできたヴェネチアのような場所はその音響効果は抜群で、特にサンマルコ広場ほどの規模になると、そのまま野外劇場になる。この広場で金管楽器を鳴らしたら、さぞかし気持ちいいだろうなと考えたのが、ブラスバンドの父といってもいいガブリエリだった。さらに歌付きの芝居を上演したら、効果満点だろうと考えたのが、オペラの創始者と見做されるモンテヴェルディだった。

音楽を聴く環境や方法の移り変わりや、楽器の進化という観点から、歴史を振り返ると、人類がいかに音楽に熱中し、心躍らせていたかがよくわかる。紀元前の昔の遺跡からは骨や土器で作られた笛や、石や金属で作られた打楽器などがよく出土する。残念ながら、木製の楽器はすぐに腐ってしまうので、証拠は出てこないが、

人類は文字というものを持たなかった時代から楽器を使いこなし、音楽を奏でていたことは確かである。古代人が吹いていた骨笛から、今日のボーカロイドに至るまで、人類は実に様々な楽器を発明してきた。

楽器店をのぞけば、そこには古代の笛の名残をとどめるオカリナやケーナから、電子楽器まで様々な品揃えだ。ギリシャ神話のオルフェウスが弾いていた琴はハープの元祖だし、葦笛が進化したものがオーボエとなり、弦をバチで叩くツィンバロンが進化すると、ピアノになる。そんな楽器の変遷を辿ることもできる。

日本では能や歌舞伎のような歌舞音曲の伝統があるが、ヨーロッパのように石造りの広場や劇場を持たず、木造の開放的な作りの建物に暮らしていたためか、少人数のお座敷で音楽を楽しむ文化が根付いた。カラオケはまさにこの日本の音楽環境の中から生まれたといってもいい。気心の知れたもの同士が集まり、それぞれのお得意の歌を披露する。そうしたお座敷芸の延長がカラオケなのだ。



音楽の再生技術

古代は基本、生演奏だけが音楽を享受する唯一の手段だった。音がよく響く洞窟での宗教儀礼がおそらく、コンサートの元祖だろうが、現代のコンサートホールはまさに人工の洞窟といってもいい。今日でもライブ演奏は音楽を聴く最高の場であるが、20世紀に入ると、音楽再生テクノロジーの歴史が始まる。その転換点になったのが、エジソンによる蓄音機の発明だった。それまではコンサートに出かけるか、演奏家を家に呼んで、演奏してもらうか、あるいは楽器を練習して、自ら演奏するかしていた。

モーツァルトやベートーヴェンも作曲のかたわら、貴族の子弟にピアノや歌の指導をして、生活の糧を得ていた。音楽家の生活は伝統的に教える仕事によって、支えられてきた。もちろん、独学の人もいるけれども、基本は師匠から弟子に受け継がれる技術のリレーによって、音楽の水準は保たれてきたのだった。

ニッパーという名の犬は誰もが一度は目にしたことがあるはずだ。ある時は陶製の置物として、ある時はぬいぐるみとして、またある時は古びたポスターやビクターの登録商標として。ニッパーは蓄音機のラッパに耳を傾け、服従の姿勢をとっている。ラッパから聞こえてくるのは主人の声である。蓄音機で再生された主人の声を聞いて、箱の中に主人が入っていると思い込んでいる。蓄音機は発明当初からそこにいない人の声を聞かせるマジックで人を驚かせていたのである。

音を蓄える機械の名にふさわしく、蓄音機のスピーカーから聞こえてく

ニュー・ストリーム・コンサート23 ～ヴィルトゥオーソ学科演奏会～

2014年11月20日　トッパンホール

原　日向子（ハープ）

木原　亨（オーボエ）

上坂愛美（ピアノ）

若田典子（トロンボーン）

太田妃佳里（オーボエ）

田村友美（ピアノ）

▲ 島田さんの著作「彗星の住人」は、2004年にご自身が台本を担当し「Jr.バタフライ」としてオペラ化。2006年、イタリアのトッレ・デル・ラーゴで毎年開催されるプッチーニ・フェスティバルで島田さんの演出により再演されました。写真は、そのときのリハーサル風景。（中央が島田さん）

る音は現代人の耳にも生々しい。とりわけ歌手の声には体温さえ感じる。まさに小さな人が箱の中で歌っているようでさえある。それは機械というより楽器に近い。金属のバネを巻き、その復元力でターンテーブルを回し、レコード盤に刻まれた溝を針がなぞって、振動の信号を読み取り、それを金管楽器と同様に長い管を通し、出口を朝顔のように広げる。そのメカニズムは極めて単純だ。むろん、電気は使わない。ヴォリュームは朝顔の前の扉の開閉角度で調節する。針圧は250グラムと大きなステーキ並で、ノイズも大きい。それを目立たなくするために分厚い木の蓋を閉める。

我が家にあるのは1927年ロンドンで作られたグラモフォン社製の蓄音機だ。それはスタンダードなタイプだが、高級機はベンツの値段に匹敵する。80年前は片面5分が限界のSPレコードに今の物価水準にして2万円ほどのコストをかけていたことになる。ベートーヴェンの「第九」一曲に10万も払う計算になる。ステレオが普及し出すと、蓄音機は廃れた。生産の全盛期はわずか7年だった。だが、この7年に作られたものには名機も多い。家に蓄音機とレコード・コレクションがあるということ、それは小さなコンサートホールを持ち、演奏家のパトロンになることに匹敵した。まさにブルジョアにしか許されない贅沢だった。そのせいか、当時の金持ちのリビングルームに置いて違和感のないように、家具としての装飾も見事だ。音楽を聴くことが神聖な儀式だった時代の名残がここにある。

蓄音機の発明はペンで記録を残す文化の賜物だろう。筆の文化である東洋とは違って、西洋では紙もしくは羊皮紙にインクを付けたペンで入れ墨を入れるように文字を書く。このスクラッチの原理を録音に応用したのが蓄音機である。エジソンは音の振動を針先に伝え、その信号を蝋管に刻み付けた。そして、その傷をもう一度針でなぞって、音を再生する装置を編み出した。

音の再生はその後、真空管やトランジスタを用いた電気的な増幅によって、大音量になってゆき、映像と結びついて、オーディオヴィジュアルの世界を広げてきた。

形式について

本を読む人の多くはストーリーを追いかけたがるものだ。起承転結は物語のみならず、論文や数学の証明問題にもある。論文では仮説を立てるが、その仮説が真であることを証明するためにこのフォーマットを使う。これに沿って論を展開すれば、あるいはディテールを積み上げていけば、そのことをよく知らない人、あるいはその出来事を経験していない人であってもよく理解できるし、納得がいく。また驚きや快感、感動に向けた道筋をつけることができる。それが起承転結の原理である。

音楽は文学以上に形式化が進んだジャンルであり、数学的理論に基づいている。

ベートーヴェンを例にとってみると、作品はどれも厳密な形式に基づいて作られているが、ただ純粋に音楽に耳を傾けていると、ベートーヴェンは聴衆が期待していることを先取りする。「このへんで繰り返しを終えないと聴衆は飽きるな」とか「ちょっとパターン化してきたからこの辺で思いっきり変なことをやってみようかな」という作為を随所に感じる。だから何度聴いても毎回違う発見があり、飽きない。ベートーヴェンは稀代のエンターテイナーと捉えるべきだと思うが、実は徹底的な形式化がなされているからこそ、聴衆を飽きさせることがないのである。

ベートーヴェンはロマン派という新しい音楽の流れを招き寄せたといわれる。そのロマン派の円熟期に、交響曲というジャンルを怪物的なものに仕立てたのがマーラーである。

歌唱付きの巨大なオーケストラ、長い演奏時間、豊富なディテール、ヴィジュアル・イメージにあふれた音楽、どれをとっても、マーラーの交響曲は聴衆に高い満足度を約束するような作りになっている。かつて、黒澤明は自作『七人の侍』の制作に際し、「ビフテキの上にバターを塗って、蒲焼を乗せたような映画」を作りたいといったが、マーラーの交響曲もまた、そのような胸やけするほどの満腹感をもたらしてくれる極上のエンターテイメントなのである。さらに楽曲にはマーラーが同時代の哲学や小説から受けたインスピレーションもふんだんに盛り込まれているので、音楽による世界観の表明という側面

▲ 武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会
（2014年12月8日／東京オペラシティ コンサートホール）

もあり、ただの娯楽にとどまらず、精神的なカタルシスを与えてもくれる。特に第二番『復活』、第八番『千人の交響曲』、第九番、未完だが、第十番のアダージョなどは神聖な儀式としてのコンサートにふさわしいプログラムで、レクイエムやオラトリオの演奏に通じる浄化作用もある。ハイドンの時代はまだ交響曲は均整の取れた形式美に留まっていたが、ベートーヴェンの第九に至って、ロマン主義の疾風怒濤に揉まれ、ベルリオーズの幻想交響曲でグロテスクな怪物性を纏い、ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』以後は、その影響をもろに受けたブルックナーによって、この古い形式は恐竜化し、マーラーに至って、大衆小説のごとき雑食性と自由を獲得した。

音楽でも演劇でも小説でも、表現者は自由気ままにやっているように見えて、実は忘れられた形式を復活させたり、アレンジしたり、オーソドックスな形式から逸脱できずにがんじがらめになったりしている。

創作とは形式との格闘にほかならない。人生も一種のパフォーミングアートだから、誰もが形式を踏襲することになるのだが、誰だって同じことの繰り返しには飽きるので、型通りの人生を踏み外してみたいとの誘惑に駆られるものなのだ。それはアーティストに限った話ではない。私たちは誰しも、多かれ少なかれ、アーティストの気質を持ち合わせている。

このように音楽が辿ってきた歴史をある程度ふまえると、この先、音楽がどんな未来に向かって進んでゆくのか、おぼろげながらわかってくるに違いない。未来はいつだって、忘れられた過去の復活なのである。

音楽の万華鏡 29

現代邦楽のゆくえ

尺八、箏などの日本伝統音楽の楽器を使って、西洋音楽の手法で作曲された作品を一般に現代邦楽と呼んでいます。武満徹作曲の琵琶、尺八とオーケストラのための《ノヴェンバー・ステップス》（1967）は現代邦楽の代表的な例の一つです。武満が《ノヴェンバー・ステップス》の構想を「琵琶と尺八がさししめす異質な音の領土を、オーケストラに対置することで際立たせるべきなのである」と語ったのは有名ですが、この言葉には、琵琶、尺八に対して作曲者が手ごわさを感じ、畏れを抱いているのが読み取れます。

《ノヴェンバー・ステップス》のオーケストラ・パートは、一奏者の単位にまで声部が分けられて、十数個あるいは数十個の音高に分岐しては一つの音高に収束するプロセスを繰り返します。武満は、琵琶のばち音や尺八のむら息などの衝撃的で不安定な音にオーケストラを通して対応するために、声部を膨らませたり、収束させたりを刻々と行っているのです。このように声部を細分割する手法をマイクロ・ポリフォニーと呼んでいますが、琵琶、尺八の音を指針としてその手法を用いるとき、武満のマイクロ・ポリフォニーは欧米の作曲家のそれには還元できない武満独自の響きを創出しています。

《ノヴェンバー・ステップス》の6年後、武満は同じく琵琶、尺八とオーケストラのための《秋》（1973）を書いていますが、そこには琵琶、尺八に対する畏れは感じられず、オーケストラと琵琶、尺八はなめらかに推移していきます。真剣勝負のように邦楽器と向き合う作曲風景を彷彿させるのは、《秋》よりも《ノヴェンバー・ステップス》のほうです。

その後、若い世代の作曲家たちが日本伝統音楽の楽器を使って作品を書く機会は減っているように見受けます。畏れを抱かせる楽器を見出せない、あるいは畏れを抱かせる音を要しない、いずれにしても畏れを抱かせる音の不在は、創意と想像力の弱体化に繋がらないかと懸念されます。

なお、《ノヴェンバー・ステップス》については本誌第99号の音楽の万華鏡（題目：作品の衝撃）で、その演奏スタイルの変遷を話題にしています。

楢崎洋子（本学音楽学教授）

卒業生インタビュー

歌い続けてこの場所に

● 森谷真理（ソプラノ） ●

武蔵野音楽大学、同大学院を経てニューヨークに渡り、さらなる研鑽を積んだのちにソプラノ歌手の道へ。2006年の大晦日には、メトロポリタン歌劇場にて巨匠ジェイムズ・レヴァイン指揮「魔笛」で夜の女王役を演じ大喝采を浴びた森谷真理さん。世界最高峰のメトロポリタン・オペラにおいて、「マダム・バタフライ」以外の作品で日本人ソプラノがデビューしたのは初という快挙でした。その後も世界の歌劇場を舞台に活躍されている森谷さんに、昨年9月、日本での初舞台となるびわ湖ホール「リゴレット」のリハーサルのために帰国した折、思い出深い江古田キャンパスでお話を伺いました。

（2014年9月17日取材、文責編集部）

森谷真理 *Mari Moriya*

栃木県小山市出身。淑徳与野高等学校卒業。武蔵野音楽大学卒業、同大学院修士課程修了。ニューヨーク・マネス音楽院でプロフェッショナル・スタディを修了後、パームビーチ・オペラでプロ・デビュー。2007年BBCカーディフ国際声楽コンクール日本代表、第5回ヴェロニカ・ダン国際声楽コンクール1位、第2回チャールズ・A・リーナム声楽コンクール1位など国際コンクールで受賞歴多数。2006年、ニューヨークのメトロポリタン・オペラにて、J.レヴァイン指揮、J.テイモア演出『魔笛』夜の女王役でデビュー。2007/08シーズンにアイルランド・オペラ『トゥーランドット』リュー役でのヨーロッパ・デビュー後、ヨーロッパ、アメリカを股に掛け数多くのオペラに出演。4年間オーストリア・リンツ州立劇場の専属歌手として活躍したのち、現在はフリーランスとして多くの舞台に立っている。2014年10月のびわ湖ホール『リゴレット』ジルダ役以後も各国で出演予定は多数。日本では、2015年7月に東京二期会『魔笛』夜の女王役で出演の予定。小山ふるさと大使、二期会会員。

今につながる母の一言

―― 最初の音楽との出会いは？ 音楽の道に進もうと決めたのはいつ頃？

森谷　私の母が声楽家で、生まれたときから音楽に囲まれていて、オペラも身近なものでしたね。5歳くらいからピアノも始めました。ただ、考古学者になりたい、精神科医になりたい、獣医になりたいなどと、漠然と将来を夢見ていました。それが高校1年の秋、クラス分けのために真剣に進路と向き合うことになり、いろいろ考えた挙げ句、音楽の道が一番上手くいきそうな気がしたというわけです。

―― お母様から進路についてアドバイスを受けたりしたのでしょうか？

森谷　まずピアニストに関しては、なれるかどうかというより、初めから選択肢にはありませんでした。音大に進むと決めたのは16歳の終わり頃。声楽家になると決めたので、音大受験を決断しました。それを告げると、母は一言「一度決めたことは、やめないでね」。その一言が今に続いているわけですから、親の影響力ってすごいですね（笑）。実は母も武蔵野の出身で、母に平良栄一先生を紹介してもらい、必然的に私も武蔵野に進むことになりました。

―― 武蔵野の大学院からニューヨークのマネス音楽院に進んだのち、2006年にメトロポリタン・オペラ（以下MET）に「魔笛」夜の女王役でデビューしますが、その経緯は？

森谷　留学して2年目、雑誌で「メトロポリタン・ナショナルカウンシルオーディション」の告知を目にし、受けたところファイナリストに選ばれ、それをきっかけに、いろいろな仕事のオファーを受けるようになったん

▲ シアトルオペラ 『魔笛』 夜の女王役（2011年5月）

▲ リンツ州立劇場　『薔薇の騎士』　ゾフィー役（2012年から上演。2015年も5･6月に上演予定）

です。METがもともとあったドイツ語版の魔笛のプロダクションを子供用に短縮して、英語で上演する企画を新しく立て、そのための夜の女王役のキャストを探しており、オーディションに呼ばれました。結果、セカンドキャストとして役をいただき、それがモーツァルト生誕250周年の2006年、MET出演につながったということです。

多彩なオペラの経験

―― 2010年から4年間、オーストリア・リンツ州立劇場の専属になり、その後はフリーランスとして数多くの舞台に立たれています。特に印象深いものは？

森谷　全幕通して出演したオペラの役は2015年1月までで25、さらに9月までに2役増えます。プロダクションごとにそれぞれ思い出があります。例えば、夜の女王はアメリカ、ドイツ、オーストリア、イギリスなどで演じていますが、毎回違った衣裳、違った指揮者、違った演出家でやるわけですから、一つの舞台ごとに新しい発見があるわけです。性格、立ち居振るまい、心情など、役ごとに違ってきますし、また演出のスタイルもさまざま。初めに演出家からどんなアプローチを考えているかを聞き、そこに私なりの解釈を表現していくケースが普通ですが、最初から自由にやっていいと言われる場合もあります。

―― どのようにして役を獲得するのでしょうか？

森谷　マネス音楽院を卒業後、エージェントがついてからは、エージェントがオーディションを見つけてくる、仕事を取ってくるというカタチですね。オファーのある場合もありますが、基本的にはやはりオーディションです。

▲ 左上写真と同じ

―― プロの歌手として森谷さんが常に心掛けていることは？ また、体調管理のために特に気にしていることはありますか？

森谷　舞台に上がる際に考えていることは、とにかくお客様に楽しんでもらうこと。それに尽きます。体調管理に関しては、特別なことは何もしていません。暴飲暴食はしない、風邪をひきかけたら早く寝る、そんな当たり前のことをするだけです。

武蔵野の思い出

―― 武蔵野で学んだことで、いま役に立っていることは？

森谷　良く覚えているのは、指揮の授業のときに先生がこうおっしゃったんです。「どこまで頑張ってやり続けることができるか、我慢できるか、それが大切だ」と。これは母の言葉にも通じることですね。私は自分が声楽家でいることが偉いとも何とも思いませんが、ただ、やり続けてきたことで今があるし、続けてきたということが何より大事なんだと思っています。続けるって、結構しんどいですから。あと、聴音に関しては、武蔵野でしっかり学んだおかげで、その後苦労することはなかったですね。

―― 武蔵野で師事した先生についてお聞かせください。

森谷　平良栄一先生は常に音楽のことを考えておられる、とても熱心な先生です。そして、すごく優しくて、私は自分の歌いたい曲をノビノビと勉強させていただきました。師事していた途中、先生ご自身がスイスに1年間留学されて、その間は高柳和子

先生に教えていただきました。高柳先生は非常に指導が細やかな方で、お二人の異なるタイプの先生に師事したことで、声楽家としてすごく勉強になり、幅が出たように思います。オペラコースでも、横山修司先生にたくさんのことを教えていただきましたし、武蔵野では素晴らしい先生方に出会えて幸せでした。

―― 江古田校舎は改築のために取り壊されてしまいますが、この校舎の思い出は？

森谷　空いている練習室を探して、いつもうろうろと階段を上り下りしていました。待ち合わせなどで良く使ったのは、図書館の前の学生ホール。オーディオルームも頻繁に利用しました。当時はレコードからCDに切り替わる時期でしたし、今のように検索用コンピューターもなかったので、目録カードを調べたり、利用するのにすごく手間がかかったことを覚えています。あと、オペラコースの練習場所だったモーツァルトホールも思い出深いですね。

まだまだ勉強

―― 今シーズンからフリーになられました。今後のスケジュールは？

森谷　4年間、リンツ州立劇場の専属でしたが、とにかくスケジュール的にきつかったですね。毎日違うオペラに出演するか、リハーサルに参加していました。朝リハーサル、夜本番、その繰り返しでした。リンツは好きですし、この4年間は非常に勉強になりましたが、もっといろいろな歌劇場で歌いたい、自分の可能性を広げたいという思いから、フリーになることに決めました。今後のスケジュールとして、2015年は二つの新しい役が決まっています。一つはベルギーのアントワープで1本、もう一つはリンツで「椿姫」に出ることになっています。さらに7月には日本で、D.R.デイヴィス指揮、宮本亜門さん演出の二期会「魔笛」があります。リンツで公演を重ね好評を博している舞台ですが、亜門さん特有のウィットに富んだ演出が、日本向けにどうアレンジされるか私も楽しみです。

▲ リンツ州立劇場　『マリア・ストゥアルダ』タイトルロール（2011-2012年シーズンに上演）

―― 今後、演じてみたいオペラは？

森谷　キャリアが終わるまでには、「ルル」「マダム・バタフライ」「ノルマ」、あと「タイス」、「イドメネオ」のエレットラ役をぜひやってみたいですね。

―― ニューヨークに留学し、大勢の外国人と一緒に学ぶなかで、何か感じるものはありましたか？

▲ 武蔵野音楽大学　江古田キャンパスにて

森谷　プロフェッショナル・スタディというレベルの高いコースに入ったこともあって、あらゆる面で私は出遅れていると最初から感じました。追いつくのに必死でした。例えばアメリカの大学は、卒業したら即プロになれるくらいのレベル。語学の面でも、英語はもちろん、ドイツ語・フランス語・イタリア語など、とりあえずどんな外国語でも読めるのが普通だし、話せる人も多かったですね。今になって思えば、準備不足でした。

―― ご自身の武蔵野時代を振り返って思うことは、そして後輩たちへのメッセージをお願いします。

森谷　自分の大学時代を振り返れば、やはり語学、特にドイツ語をもっとしっかり勉強しておくべきでした。対位法もやっておけば良かった。あと、もう少し頑張っていろいろな曲を譜読みしておくべきだったと後悔しています。私は大学時代、栃木県の自宅から通学していて、入間キャンパスのときは片道3時間もかかっていました。往復6時間、その時間を譜読みにあてていたら…（笑）。何かを掴みたいと思えば、必ず壁にぶつかったり苦労したりすると思いますが、挫けずに頑張って欲しいと思います。私自身、まだまだ克服すべき課題がたくさんありますから、毎日が勉強です。

感動への誘い ── 平成 26 年度 後期定期演奏会

昨年11月から12月にかけて、武蔵野音楽大学の後期定期演奏会が、学内外で次々と繰り広げられました。

まずは11月9日、学部2年生を中心とした管弦楽団（指揮：カールマン・ベルケシュ氏、オーボエ独奏：太田妃佳里　ヴィルトゥオーソ学科3年）が入間市市民会館で行われた入間市立中央公民館主催の「市民コンサート」に出演、満席の市民から盛大な拍手が送られました。続く21日には、同じく学部2年生で構成されたシンフォニック ウィンド オーケストラ（指揮：前田 淳氏）が入間キャンパス バッハザールで演奏会を開催し、吹奏楽の名曲をフレッシュなサウンドで披露しました❶。

12月には本学管弦楽団合唱団演奏会（指揮：北原幸男氏、合唱指揮：栗山文昭氏）が、バッハザール（6日）❷、東京オペラシティ コンサートホール（8日）［写真:P5］で行われました。ブラームスの「運命の歌」、ベートーヴェンの「交響曲第9番」〔ソプラノ：泉 貴子、アルト：鳥木弥生、テノール：山田精一（6日）・樋口達哉（8日）、バリトン：豊島雄一各氏〕で響く高らかな歌声は、会場に多くの感動をもたらしました。

室内管弦楽団は、「～モーツァルトの夕べ～」と題し、12月12日に江古田キャンパス　ベートーヴェンホールにて演奏会を開催❸。インゴ・ゴリツキ（ob.）、青山聖樹（ob.）、山本正治（cl.）、岡崎耕治（fg.）、丸山 勉（hrn.）の本学指導陣各氏をソリストに迎え、「オーボエ、クラリネット、ホルン、ファゴットのための協奏交響曲」や「交響曲第29番」などのプログラムを、熟練の技術と美しいハーモニーで奏で、満員の聴衆を魅了しました。

17日には、ウィンドアンサンブルが、東京オペラシティ コンサートホールで演奏会（指揮：レイ・E. クレーマー氏）を行いました❹。コープランドの「戸外のための序曲」、サリエリの「スペインのラ・フォリアによる変奏曲」、樽屋雅徳の「斐伊川に流るるクシナダ姫の涙」などを演奏。緻密に作り上げられたサウンドに会場からは大きな拍手が送られ、平成26年度の演奏会シリーズを成功裏に締めくくりました。

音楽の秋 —— 多彩な平成26年度後期公開講座シリーズ・演奏会

❁ 武蔵野音楽大学 室内合唱団演奏会

9月22日／ベートーヴェンホール

指揮：片山みゆき、栗山文昭

声楽専攻学生の選抜メンバーで構成される本学室内合唱団が、演奏会を開催しました。プログラムは、“祈りの歌”として1000年以上歌い継がれてきたグレゴリオ聖歌にはじまり、次いで民族音楽を基に作られた躍動的かつ哀愁漂う「ジプシーの歌（ブラームス作曲）」、最後は日本合唱曲の名曲「水のいのち（高田三郎作曲）」で締めくくりました。時代や技法、民族や宗教、地域性が異なるプログラムを、片山みゆき、栗山文昭両氏の指導・指揮のもと、それぞれ興味深く個性的に表現しました。

❁ エヴァ・メイ声楽公開レッスン

9月29日／ベートーヴェンホール

通訳：平良栄一

多くのベルカント・オペラ等で世界を魅了し、日本にも沢山のファンを持つ、イタリアの代表的ソプラノ歌手エヴァ・メイ女史の声楽公開レッスンが開かれました。本学学生3名を対象としたレッスンでは、「言葉の明確な発音」「呼吸」「支え」を正確に理解し、修得することの大切さを終始説かれました。そして「夢は叶う、夢に向かって頑張ってください」と、世界の主要歌劇場で活躍する女史から力強いメッセージが贈られ、受講生、聴講生にとって今後の研鑽への大きな指針と励みを手にした貴重な講座となりました。

❁ モーリス・クレール オルガン・リサイタル

9月30日／ベートーヴェンホール

フランス・オルガン界の第一人者として、世界的に評価されるクレール氏がリサイタルを開催。前半は、バッハをはじめバロック時代の作品を中心に、後半は、19・20世紀のフランス・オルガン楽曲と対照的なプログラム。氏の多彩なレジストレーションと卓越した音楽性で、ベートーヴェンホールのオルガンの魅力を存分に引き出した一夕となりました。

❁ アルヌルフ・フォン・アルニム ピアノ・リサイタル

10月29日／ベートーヴェンホール

ドイツ・エッセン・フォルクヴァング音大で教鞭を執る傍ら、世界各地で演奏会、講習会活動を展開するアルニム教授。今回のリサイタルでは「偉大なる遺産～ピアノ音楽の聖典～」のタイトルのもと、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトの、すべて変ロ長調のピアノソナタで統一した興味深いプログラム。ドイツの伝統に根ざした解釈による深く内面的な演奏で、観衆を惹きつけました。

❁ アクセル・バウニ　歌曲公開講座 ～20世紀以降の歌曲～

通訳：子安ゆかり

10月31日／モーツァルトホール

著名な歌手を支えるピアニストとして国際的なキャリアを持ち、特に現代歌曲のスペシャリストとして活躍する、アクセル・バウニ氏による歌曲公開講座が開催されました。ヴォルフ、マーラー等の歌曲を題材に、声とピアノが一体となって、詩に込められた感情を的確に表現するドイツ歌曲への解釈を、歌い手、弾き手それぞれに丁寧に指導され、その深奥に触れる有意義な講座となりました。

ジャン＝マルク・ルイサダ ピアノ公開講座 ～インタビュー＆マスターコース～

インタビュアー：福井直昭
通訳：重松万里子
11月19日／ベートーヴェンホール

ショパンコンクール入賞以来、国際的に活躍し、日本でも圧倒的な人気を誇るルイサダ氏のピアノ公開講座が行われました。冒頭のインタビューでは、これまでにリリースしたCDのスタイルの変化や、近々に開催される自身のリサイタルの抱負などについて語られました。その後のマスターコースでは、3名の学生にショパンの弾き方をレクチャー。「あくまで古典的に、しかし音色はロマンティックに」という言葉の通り、一つの音へのこだわりや脱力の方法、指使いや曲想についてなど、細部にわたる詳細な指導に、学生、聴講者は熱心に聞き入っていました。また、技術的な面に留まらず、音の向こう側を表現し聴き手に届けること、ピアノに喜びを持って向き合うことを話され、ルイサダ氏のショパン：ノクターンの演奏という聴衆へのプレゼントをもって、3時間に及ぶ公開講座は締めくくられました。

ヴィンチェンツォ・スカレーラ 公開講座 ～イタリアオペラの歌唱法と伴奏法～

通訳：松本美和子
11月21日／モーツァルトホール

声楽伴奏の世界的権威スカレーラ氏が、「イタリアオペラの歌唱法と伴奏法」をテーマに公開講座を開催。通訳は、長年共演を重ねてこられた松本美和子特任教授が務めました。ピアニストにはオペラの内容、また、オーケストラスコアを勉強し伴奏に活かすこと、細かな演奏法などを、歌手にはフレーズの感じ方、音楽の組み立て方、発声と言葉の大切さなどを懇切丁寧に指導されました。氏の実演を交えながら進んだレッスンでは、“スカレーラ流”とも称される、ピアノでオーケストラの音色を表現し、受講生、聴講生を一瞬にしてオペラの世界へと誘いました。

学生・生徒による演奏会

9月29日王子ホールでは、「第18回附属高校在校生と新卒業生によるコンサート」が、10月8日モーツァルトホールでは、本学音楽学学科学生による企画コンサート「モスクワ音楽院同窓会 －ラフマニノフの原点－」が、さらに11月20日には、「ニュー・ストリーム・コンサート23」として本学ヴィルトゥオーソ学科学生による演奏会［写真：P3］が開催され、これまでの研修の成果を次々と発表しました。日々、自己研鑽に励む出演者にとって、実際の舞台を通して得た貴重な体験は、今後の音楽探求への大きな糧となったことでしょう。

▲附属高校在校生と新卒業生によるコンサート（王子ホール）

東京芸術劇場コンサートオペラに本学合唱団出演

昨年9月6日、東京芸術劇場コンサートオペラ vol.2 ヴェルディ「ドン・カルロス」パリ初演版の「全5幕フランス語上演　演奏会形式」日本初演に、本学合唱団が出演しました。〔指揮：佐藤正浩氏、管弦楽：ザ・オペラ・バンド（首都圏プロオーケストラメンバーによる編成）、合唱指導：横山修司氏（本学准教授）〕

この公演のために選抜された声楽学科の学生たちは、フランス語の発音に苦心しながら、5月から練習を積んできました。ヴェルディのオペラでは、重要な役割を担う合唱パートですが、その場面ごとに響きや表現を変えて舞台を彩り、著名な出演者の皆様との共演を見事に果たし、高い評価を得ました。

現・江古田校舎では最後の開催！―― ミューズフェスティヴァル

秋晴れに恵まれた昨秋10月、入間キャンパスでは第39回、江古田キャンパスでは第63回のミューズフェスティヴァルが開催されました。

「武蔵野音楽学園江古田新キャンパスプロジェクト」が進む中、これまで両キャンパス個々に活動していた学友会組織は、平成25年度から統一されました。この学友会の本年度活動スローガンである「継」を、フェスティヴァルでは共通テーマとして掲げ、江古田は「この時、この瞬間をこの仲間と」、入間は「過去から未来へつなぐ音」というそれぞれのサブテーマにふさわしい企画を、附属幼稚園児、附属高校生、大学生、教職員が一体となってつくりあげました。

各ホールでは、学生による演奏をはじめ、管弦楽団、コンサートバンド、フルートオーケストラ、本学教員による招待演奏会が連日繰り広げられ、教室では、クラブや授業クラスのさまざまな研究発表、展示が行われた他、クラブ、楽器会、県人会による模擬店も出店され、両キャンパスは活気に溢れました。

また、平成27年度から始まる建て替え工事のため、現在の江古田校舎での開催が最後になるということで、大勢の卒業生が江古田キャンパスに集いました。創立当初からの武蔵野のあゆみを写真でたどる特別展示をはじめ、思い出がたくさん詰まった江古田の学び舎を感慨深げに見てまわり、あちらこちらで懐かしい思い出話に花が咲きました。2年後には運用が開始される新しいキャンパスへの期待に、大いに沸いたフェスティヴァルは、盛会裏に幕を閉じました。

平成28年度末、江古田新キャンパス落成を機に、ますます発展が期待される武蔵野音大の新たなスタートと共に、伝統あるミューズフェスティヴァルも更に進化して、後輩たちに受け継がれていくことでしょう。

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金　ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、江古田新キャンパス建設基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。　学校法人　武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、平成26年8月1日から10月31日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

【同窓生】秋山憲子様　有賀光世様　今津初美様　植田礼子様　江﨑順代様　太田春子様　岡野正子様　奥田弘恵様　尾中千榮子様　柿沼香織様　加勢富子様　金谷知恵子様　喜多嶋初枝様　喜屋武明子様　栗谷佳寿代様　黒田悦子様　斎藤叡子様　佐々木迪子様　澤井聖子様　下山田孝子様　周藤みのり様　杉浦桂子様　鈴木しおり様　瀬川道子様　関川祐子様　竹下芙紀子様　竹田郷子様　竹村 正様　巽 蔦枝様　田村るみ様　外岡久子様　豊吉尚子様　中野久賀子様　中村恵子様　生田目恭子様　野口潤子様　林 裕美子様　平田久美子様　福原悦子様　宝居三由美様　北條令子様　星野慶子様　細田淳子様　松浦靖子様　松本和子様　松本雅子様　松山 香様　三井純子様　宮本暢子様　麦倉礼子様　本倉雅子様　森田靖子様　安原信子様　吉澤美智子様　吉田優子様　脇野恵美子様　昭和63年入学同期生一同様

【在学生・同ご父母】小林千佳子様　島田真一様　霜村典宏様　辻 広巳様　冨田礼司様　西田勝一様　野口高志様　三上浩文様　武藤剛司様　茂木弥生様　横塚哲夫様

【役員・教職員・一般・他】小門敬子様　富樫英夫様　中田淳子様　二瓶武廣様　濱口妃登美様　福井礼子様　村田和美様　山中 光様　渡部賢士様　（他に匿名を希望される方20名）

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

●瑞宝小綬章受章　星野佳正（本学講師）

●アメリカ・シカゴのオペラハウス「Lyric Opera of Chicago（リリック・オペラ・オブ・シカゴ）」の研修所「Ryan Opera Center（ライアン・オペラ・センター）」に日本人として初めて合格
大西宇宙（平成20年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了）

●第１回　国際打楽器フェスティバル　国際打楽器コンクール（イタリア）　マリンバ部門　第１位入賞
高橋治子（平成10年大学卒マリンバ専攻　本大学院修士課程修了　本大学院博士後期課程単位取得）

●第68回　全日本学生音楽コンクール　全国大会　声楽部門　大学の部　第１位入賞
相原里美（平成25年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程２年次在学）

●第25回　友愛ドイツ歌曲（リート）コンクール
第１位入賞、文部科学大臣賞、日本R. シュトラウス協会賞、聴衆者賞受賞
照屋篤紀（平成25年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程２年次在学）
第３位入賞、日本歌曲賞受賞　杉山由紀（平成20年大学卒声楽専攻　本大学院修士課程修了）

●第4回　世田谷区芸術アワード“飛翔”　音楽部門受賞　會田瑞樹（平成24年大学卒打楽器専攻　本大学院修士課程修了）

●独立行政法人　日本学生支援機構　平成26年度　優秀学生顕彰　文化・芸術分野　優秀賞受賞
犬飼まお（大学３年次在学ピアノ専攻）

●第72回　福山音楽コンクール　ディプロマクラスの部　ヴァイオリン部門　ランナーアップ賞受賞（1位なしの2位）　小川友子（平成24年大学卒ヴァイオリン専攻　本大学院修士課程修了　本別科在学）、●第15回　大阪国際音楽コンクール　アンサンブル部門　第2位入賞（1位なし）　三浦こと美（大学4年次在学クラリネット専攻）、●第8回　横浜国際音楽コンクール　弦楽器部門　大学の部　第2位入賞　園部智彩（大学4年次在学コントラバス専攻）、●第6回　東京国際声楽コンクール　大学生部門　第2位入賞　増渕　茜（大学3年次在学声楽専攻　本高校卒）、第3位入賞　三宅里菜（大学3年次在学声楽専攻）、●第16回　日本演奏家コンクール　ピアノ部門　大学の部　第3位入賞　橋本あすか（大学4年次在学ピアノ専攻）、野川かおる（大学3年次在学ピアノ専攻）、●第17回　“長江杯”国際音楽コンクール　打楽器部門　大学の部　第3位入賞　古家啓史（大学3年次在学マリンバ専攻　本高校卒）、●第26回　日本ハープコンクール2014　アドバンス部門　第5位入賞（日本人最高位）　三谷真珠子（大学2年次在学ハープ専攻）

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

編集後記

2015年は武蔵野音楽大学にとって更なる飛躍のための大きな変化の年となります。江古田校舎の建て替え工事が始まり、それに伴い全学年が2年間、入間キャンパスへ引っ越しとなります。MUSASHINO NEWSでもご紹介しているとおり、昨年10月のミューズフェスティヴァルには、慣れ親しんだ校舎とのお別れに多くの卒業生が駆けつけました。一抹の寂しさもありますが、2017年春には素晴らしい施設を備えた新キャンパスとの出会いが待っています。

卒業生インタビューにご登場いただいたソプラノの森谷真理さんが、「続けることの意義」を語っています。高みに至る道は、結局、一歩一歩の積み重ね以外にはないのかもしれません。今年も毎日を大切に（編）。

平成27年度学生・生徒募集　入学試験スケジュール

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科（博士後期課程）

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
大学院博士後期課程入試	平成27年2月12日㈭消印～20日㈮消印	郵送のみ	平成27年3月8日㈰～10日㈫

武蔵野音楽大学（音楽学部）

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
1年次 一般入試 A日程※	平成27年1月15日㈭消印～2月4日㈬消印	平成27年2月3日㈫・4日㈬	平成27年2月18日㈬～23日㈪
1年次 一般入試 B日程※	平成27年3月5日㈭消印～13日㈮必着	平成27年3月14日㈯	平成27年3月16日㈪～19日㈭
3年次 編・転入学入試	平成27年1月16日㈮消印～23日㈮消印	郵送のみ	平成27年2月10日㈫～12日㈭

● 一般入試A日程およびB日程の受験では、国語・外国語（英または独）について、大学入試センター試験を利用できます。

武蔵野音楽大学（別科）

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
別科入試	平成27年1月21日㈬～28日㈬消印	郵送のみ	平成27年2月10日㈫・11日㈬・祝

武蔵野音楽大学附属高等学校（音楽科）

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
附属高等学校 推薦入試	平成27年1月8日㈭～16日㈮必着	郵送のみ	平成27年1月22日㈭ 入間キャンパスにて実施
附属高等学校 一般入試	平成27年1月23日㈮～30日㈮消印	郵送のみ	平成27年2月11日 ㈬・祝

＊ 入学試験の詳細については、各入学試験要項でご確認ください。
＊ 上記、入学試験は、江古田キャンパスで実施します。（附属高校推薦入試を除く）
＊ 各入学試験要項は、郵送及び江古田キャンパスで取り扱っています（要項・送料は無料）。要項の請求は、大学ウェブサイトの資料請求フォームからご請求ください。また、お電話、郵送にてご請求の場合は、氏名、住所、電話番号、および高校、大学1年次、大学3年次、大学院、別科の別をお知らせください。
武蔵野音楽学園広報企画室 〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1 TEL.03-3992-1125（広報企画室直通）
大学ウェブサイト　http://www.musashino-music.ac.jp/

音楽教室（江古田・入間・多摩）　生徒募集のお知らせ

受験資格（平成27年3月末現在）

プレコース		3歳
スタンダードコース ソルフェージュコース	初級	4歳～小学校1年生
	中級	小学校2年生～小学校6年生
	上級	中学校1年生～高等学校2年生
受験コース	高校	中学校1・2年生
	大学	高等学校1・2・3年生
エクセレンスコース（江古田音楽教室のみ設置）		5歳～高等学校2年生

【前期入学試験】平成27年3月8日㈰　午前10時開始
各音楽教室　●エクセレンスコースは江古田音楽教室で行います。
【願書受付】平成27年2月4日㈬～2月21日㈯
＊入学試験の詳細については、平成27年度生徒募集要項でご確認ください。
＊要項は郵送及び各音楽教室で取り扱っております（要項・送料は無料）。
ウェブサイトの資料請求フォームからもご請求いただけます。
その他詳細については、下記へお問い合わせください。
江古田音楽教室　TEL.03-3994-7536　　入間音楽教室　TEL.04-2932-1111
多摩音楽教室　TEL.042-389-0711
音楽教室ウェブサイト　http://www.musashino-music.ac.jp/music_school/

● 表紙の顔

インゴ・ゴリツキ教授

ドイツの著名なオーボエ奏者、I. ゴリツキ教授は、1984年に、武蔵野音楽大学の客員教授として初めて招聘され、現在までたびたび着任し、演奏会の開催、学生の指導にあたっています。昨年も、11月中旬から1ヶ月滞在され、学生の指導に加え本学室内管弦楽団との共演で聴衆を魅了しました。

教授は、フライブルク音楽大学でフルートをG. シェックに、ピアノをE. ピヒト＝アクセンフェルトに師事し、さらにデトモルト音楽大学に入り、H-P. シュミッツのもとでフルートを研鑽後、20歳の時にオーボエに転向、H. ヴィンシャーマンに師事し、オーボエ奏者としてのキャリアを歩み始めました。1964年ドイツ音楽大学コンクールオーボエ部門第1位他、プラハ、ジュネーヴなどの国際音楽コンクールに多数入賞しています。

1966年から69年までバーゼル交響楽団、1969年から76年までフランクフルト放送交響楽団のソロ奏者を務めたほか、ツェルマットで室内楽演奏会を数多く開催しました。また、シュトゥットガルト国際バッハ・アカデミー、ザルツブルク国際夏期講習会をはじめ、各地でマスタークラスに招かれるなど幅広い音楽活動を繰り広げました。

1976年からはハノーファー音楽大学の教授となり、その後シュトゥットガルト音楽大学で後進の指導にあたりました。

レコーディングも多数行っていて、2012年にリリースしたCD “Devienne：Sonatas for Oboe and for Bassoon” で2013年エコー・クラシカル賞（室内楽録音部門）を受賞しました。また、バッハやモーツァルトの原典版の復元にも力を入れ、そのいくつかはヘンレ社から出版されています。

現在は主に指導者として活動し、2012年から Korea National University of Arts（韓国芸術総合学校）の客員教授も務めています。

2002年ロットヴァイル文化財団芸術賞受賞。武蔵野音楽大学客員教授。

【今後の音楽活動】
●6月～7月
Internationales Musikfestival “Sommer sprossen” in Rottweil 開催。
（1967年設立、ゴリツキ氏主宰　ドイツ ロットヴァイル市）
●7月
Ticino Musica Festival にゲスト講師として招聘。（スイス　ルガーノ市）

魚板

全長　89cm　日本

縁起物として古くから日本人に貴ばれてきた鯛をまるごと楽器にしてしまうという、新年号にふさわしい「めでたい」風貌のこの楽器、名を魚板という。

魚板は禅との関わりが深く、主に禅宗の寺院などで用いられる。大型のものでは数メートルにも及び、寺院の堂内に吊るされた姿は圧巻で一際存在感を放つ。小型のものでは50センチメートルぐらいからあり、主に茶事で用いられることが多い。

修行僧たちは寺院で毎日規則正しく清規（しんぎ）の定めに従って生活を行っているが、これらの合図には言葉を用いず、すべて鳴らしものの種類によって区別して知らせるのである。魚板もこのような鳴らしものの一種で、食事を知らせる合図などで打ち鳴らされる。魚形という個性的な形体には意味があり、魚はまぶたがなく昼夜を問わず目をつぶらないことから、修行僧に対して居眠りを戒めるという意味合いが含まれているようである。

京都黄檗山萬福寺（おうばくさんまんぷくじ）に代表されるように、通常は鯉や龍などをモチーフとしている例が多く見られ、写真のように鯛をモチーフとした方が少ないようである。鯉や龍が口に珠をくわえていたり、頭部は珠取り龍で尾部は魚形という変型例もある。珠にもまた禅の考えに基づいて三つの煩悩（むさぼり、怒り、愚痴）を表す意味があり、これらを吐き出そうとしているのである。

中国では、鯉は古くから信仰や食習慣と結びついて最も珍重された魚であった。日本でも中国文化の影響を受けて古代から中世にかけて鯉が珍重された時期もあったが、いつの間にか魚の王は鯛となった。鯛の赤が吉祥を表す色として慶祝の象徴になり、端整な姿が日本人の嗜好に合致して鯛信仰を生んだのだろう。そう考えると、所蔵する写真の楽器は、禅とともに中国から伝来した可能性の高い魚板が、その後日本的に転化したタイプと考えられないだろうか。

なお、お寺の楽器として私たちに親しみのある木魚は、実はこの魚板から派生したものとも言われている。

（武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵）

江古田キャンパス楽器博物館休館のお知らせ

「江古田キャンパス楽器博物館」は、リニューアルオープンに向けて、現在休館中です。平成28年度末に落成予定の江古田新キャンパス内にリニューアルオープンいたします。なお、「入間キャンパス楽器博物館」及び「パルナソス多摩楽器展示室」は通常通り開館しています。休館中は、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

目次

謹んで新春のお慶びを申し上げます …… 1
福井直敬

音楽なしには生きられない …… 2
島田雅彦

音楽の万華鏡 …… 5
現代邦楽のゆくえ　楢崎洋子

卒業生インタビュー …… 6
歌い続けてこの場所に　森谷真理

MUSASHINO NEWS …… 9
- 感動への誘い―― 平成26年度 後期定期演奏会
- 音楽の秋―― 多彩な平成26年度後期公開講座シリーズ・演奏会
- 東京芸術劇場コンサートオペラに本学合唱団出演
- 現・江古田校舎では最後の開催！―― ミューズフェスティヴァル
- 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金　ご寄附をいただいた方々
- 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
- 平成27年度 学生・生徒募集　入学試験スケジュール
- 音楽教室（江古田・入間・多摩）生徒募集のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院
博士前期課程・博士後期課程
武蔵野音楽大学
武蔵野音楽大学別科
武蔵野音楽大学附属高等学校
武蔵野音楽大学第一幼稚園
武蔵野音楽大学第二幼稚園
武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園
附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発　行
学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス　●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1 TEL.03-3992-1121（代表）
入間キャンパス　●〒358-8521 埼玉県入間市中神728 TEL.04-2932-2111（代表）
パルナソス多摩　●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1 TEL.042-389-0711（代表）

http://www.musashino-music.ac.jp/
2015年1月10日発行　通巻第112号